

農林水産省農村振興局長賞

おおななお 大中尾棚田保全組合(長崎県長崎市)

地域とともに歩み続ける棚田 ～集落の存続を目指して～

大中尾棚田は、西彼杵半島の南西部に位置する長崎市外海地区(旧外海町)にあります。本組合は平成14年3月に42名の会員で組織されました。大中尾では、水源が近くにないため、先人たちが神浦川の上流から4.2kmの水路(大井出水路)を造り、米作りを始めました。大中尾棚田は約8ha、約450枚の田んぼがあります。日本の棚田百選の選定を受けた「大中尾棚田」をより多くの方に知っていただくとともに、米作り体験を通して、日本の食文化の原点を知り、農業への理解を深めていただくことへの期待を込め、学童保育や修学旅行生などの体験受入や案山子コンテスト、フォトコンテストなど多彩なイベントを開催してきました。平成14年度からは、県下初の棚田オーナー制度に取り組み、都市部からのオーナーが地元の方と一緒に、棚田で汗を流しています。

「先祖代々受け継いできた地域の宝である棚田を自分たちの代で失くすわけにはいかない。この棚田がなくなるということは、自分たちの故郷がなくなるということ。そういうことがあってはならない。」大中尾棚田保全組合の会長が常々口にしてしている言葉です。

担い手の高齢化・後継者不足の問題は、大中尾棚田も例外ではありません。地区外・県外へ出ている子どもたちが定年を迎えるころには、地元へ、棚田に戻って来られるようにとの想いで、出来るだけ長く現状維持が続くように頑張ろうと声をかけ合っています。

棚田に水を取り入れるための水路の途中には、七丈ヶ滝という高さ27mもある滝の上部(断崖絶壁)を通る場所もあり、大変な難工事だったと伝えられています。毎年春に行われる、この水路の掃除・補修は、高齢の会員にとっては、大変な重作業ですが、毎年、丁寧に作業を行い、棚田に欠かせないこの水路を大切に守り続けています。

初年度1組からスタートした棚田オーナー制度も、8年目を迎える本年は39組となり、リピーターも増えています。昨年からは通常の体験メニュー(田植え・草取り・稲刈り・脱穀)だけでなく、水路掃除にも参加希望があり、参加したオーナーからは、棚田への愛着がさらに強くなったとの感想も寄せられました。

昨年は「第14回全国棚田(千枚田)サミット」(長崎市・雲仙市共同開催)があり、3日間で延べ2,800名の方にお越しいただきました。棚田見学会では、5,300個の竹灯籠に灯りをともし「火祭り」を行いました。先人達が水路を造る時、ろうそくの灯りで勾配を測りながら造ったという言い伝えもあり、その先人達が捧げる「献灯」という言葉がふさわしいような雰囲気もありました。柔らかく温かい灯りにサミット参加者はもちろんのこと、地元住民も感動し、今まで実施してきた交流イベントの「案山子コンテスト」と組み合わせ、今後も「火祭り」に取り組むこととしております。

また、棚田内で米を作らなくなった田んぼを活用して、そば作りを行い、10月にそばの花が咲くころには稲のかけ干しと併せてあらたな風景を楽しむことも出来るようになりました。



大中尾の棚田の風景